



志を育み、 地域とともに歩む

文部科学省「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」選定

令和7年度

埼玉・群馬未来医療人育成

シンポジウム

抄録集



日時：令和8年2月23日(月・祝) 13:00～16:30

会場：ウエスタ川越 1階 多目的ホール

01 シンポジウム次第

令和7年度 埼玉・群馬未来医療人育成シンポジウム

テーマ：志を育み、地域とともに歩む

開催日時：令和8年2月23日（月・祝） 13:00～16:30

開催場所：ウェスタ川越 1階 多目的ホール（Zoomウェビナー併用）

対象者：中学生、高校生、受験生、大学生、地域医療に関心がある方

開会の辞	埼玉医科大学	医学部長	森 茂久
学長挨拶	埼玉医科大学	学長	竹内 勤
学長挨拶	群馬大学	学長	石崎 泰樹

第1部 特別講演（参照：P7）

座長	埼玉医科大学 教授	林 健
講師	宮崎県都農町国民健康保険病院 院長	吉村 学 先生
演題	地域医療の志の育成	

第2部 プロジェクトの報告

埼玉医科大学と群馬大学の学生及び教員によるプログラム振り返り

座長	埼玉医科大学医学部医学教育学 教授	柴崎 智美
	群馬大学大学院医学系研究科 医学教育開発学分野 教授	岸 美紀子

1. 本事業の概要と本シンポジウムの主旨
2. 両大学合同の教育の報告（参照：P8～P13）
 - ① はじめて学ぶ地域医療・地域医療とチーム医療
 - ② 県境地域から学ぶ地域医療集中演習・利根川プログラム
 - ③ 埼玉医科大学 独自の取り組みについて
3. 連携医療機関からの報告（参照：P14～P15）
4. 今後の展望（参照：P16）

閉会の辞	群馬大学	医学部長	調 憲
------	------	------	-----

埼玉・群馬の医療を支える若い力に期待



事業推進代表者

埼玉医科大学 学長 竹内 勤

文部科学省の「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成」事業に採択されました「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」は、本年度で4年目、プログラムスタートから3年目を迎えました。その中で、本シンポジウムは本事業の情報発信の場として大変重要な機会となっています。「令和7年度埼玉・群馬未来医療人育成シンポジウム」の開催にあたり、一言ご挨拶させていただきます。

本年度は、プログラム1から5まで全てが本格的に始動し、興味深い活動報告が相次ぎました。令和7年9月に行われた在宅医療早期体験実習は、医学部1年生を対象として、学生が自ら在宅医療の現場を訪れ、医師や看護師のご指導のもと、実習を行いました。医学生にとって、とても大きくそして強い学習機会になったのではないかと思います。医師会の多大なるご協力のもと学生を受け入れていただいた先生がたから、大変貴重なご意見を頂戴しております。また、両大学の全学年を対象とした『利根川プログラム』は、利根川流域にある地域機関病院をバスツアーで見学するものです。施設見学に加えて、その病院で働く若手医師、先輩医師から直接お話を伺い、地域の実情なども知ることのできるプログラムです。実績が積み上がり、今後に大きな期待が寄せられています。これまでの取り組みの成果、課題、そして今後の展望などを示していただく絶好の機会です。若手医師、さらには高校生、中学生など、将来医療人を目指す人たちが、関心を持って、多く参加してくれることを、心より願っております。

今回のシンポジウムのテーマは『志を育み、地域とともに歩む』です。第1部では、宮崎県都農町国民健康保険病院で、院長としてご活躍されている吉村学先生にお願い致しました。吉村先生は、医学教育がご専門で、宮崎大学で医学部地域医療・総合診療医学講座の教授をお勤めになり、多年にわたって地域医療に貢献する医師の育成に尽力されてきました。大学教授から地域医療を実践する院長に就任され現在に至っております。人材輩出側と受入れ側の両面から、大変貴重なご経験をお持ちで、その一端を伺えるものと期待しております。

第2部では、「埼玉と群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」のプログラムを、具体的に分かりやすく紹介いただきます。教育プログラム1の『地域医療とチーム医療』では、1学年を対象とした『在宅医療早期体験実習』、教育プログラム3の『地域医学・医療学』では『地域診断』、教育プログラム5の『利根川プログラム』などについて、学生発表を中心として、教員も加わって存分に語り合ってもらいます。埼玉・群馬の未来の地域医療、地域医療教育について情報を共有し、皆様とともに考える場として行きますので、どうぞ奮ってご参加下さいます様お願い申し上げます。

群馬・埼玉県境地域における地域医療人材育成の取り組み



群馬大学 学長 石崎 泰樹

我が国は、急速な少子高齢化と人口減少の進行により、医療提供体制の持続可能性が強く問われる時代を迎えています。とりわけ地域医療においては、医師偏在や医療資源の制約といった構造的課題に加え、地域住民の生活背景を踏まえた包括的な医療の実践が求められています。こうした状況の下、地域医療を担う人材をいかに育成するかは、大学に課せられた重要な社会的責務の一つです。

群馬大学と埼玉医科大学は、この課題認識を共有し、大学の枠組みを越えた連携のもと、地域医療教育に関する合同事業を展開してまいりました。両大学が立地する群馬県・埼玉県の県境地域は、共通して医師不足という課題を抱える一方、医療圏を越えた患者の流動が日常的に生じている地域でもあります。この地域特性は、単一の大学による教育では捉えきれない視点を学生に提供し得る、極めて重要な教育資源であると捉えております。

本事業では、低学年から高学年に至る段階的な学修を通じて、地域医療への関心と理解を醸成するとともに、将来、医師不足地域で医療に貢献しようとする意識の涵養を目指してまいりました。両大学が合同で教育を実施することにより、学生は多様な価値観や専門性に触れ、地域医療を多角的に捉える視座を獲得しています。これは、今後の地域医療に不可欠な総合的判断力や協働性を育む上で、大きな意義を有するものと考えております。

今後は、これまでの取り組みを踏まえ、教育成果の可視化と評価指標の明確化を進めるとともに、対象学生および連携機関のさらなる拡充を図り、地域医療人材育成の持続的なモデルとして一層の発展を目指してまいります。また、本事業を通じて得られた知見を広く社会と共有することで、地域医療を支える基盤の強化にも寄与してまいります。

最後になりますが、本シンポジウムにご参集いただき、誠にありがとうございます。本シンポジウムが、皆様にとって地域医療教育への理解と関心を深める契機となり、埼玉・群馬の地域医療の将来について、ともに考え、意見を交わす場となることを心より願っております。

地域医療への志を育むには

事業推進責任者

埼玉医科大学 医学部長 森 茂久



「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」事業の重要なイベントである「埼玉・群馬未来医療人育成シンポジウム」も、今年で4回目の開催となります。第1回は埼玉県川越、第2回は大宮、第3回は群馬県高崎での開催でしたが、再び埼玉県に戻ってきます。両県の関係者、医療関係者、医学教育関係者、そして中高校生を含む将来医療人を目指す若い皆様、多くの方々にご参加いただき、本事業の内容、成果を少しでも知っていただきたいと存じます。

第1部の特別講演では、宮崎県都農町国民健康保険病院の吉村 学 院長をお招きして、「地域医療の志の育成」という演題でご講演お願いしています。吉村先生は、宮崎大学医学部地域医療・総合診療医学講座の教授職を務められ、令和7年度より地域の病院に院長として移られました。以前は大学で医学生、若手医師の地域医療教育に携わり、今では若い人達を地域の現場で地域医療教育を担当する立場にあり、大学、地域の病院と2つの拠点で地域医療教育を実践され、地域医療教育を熟知されている方です。将来の地域医療を担う若い方々には、地域医療の志を知る貴重な機会になるとともに、本事業を推進する上でも重要な情報をいただけると期待しております。

第2部はプログラムの振り返りとして、はじめて学ぶ地域医療・地域医療とチーム医療、県境地域から学ぶ地域医療集中演習・利根川プログラム、などの両大学合同教育の報告、続いて埼玉医科大学独自の取り組みを取り上げます。そして実習を受け入れていただいている、桐生厚生総合病院、秩父市立病院と2つの連携医療機関から報告していただきます。

他方、第3回に引き続き、シンポジウムの前には中高生・受験生を対象に、埼玉医科大学及び群馬大学の医学生が対応する「医学生とのふれあい相談会」を開催いたします。またポスター掲示、動画視聴コーナーも設置する予定です。

ポストコロナ事業は4年目となり、プログラムは順調に進んでいます。「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」事業の内容、教育効果をご確認いただき、今後の事業推進、継続のために、ご意見をいただければ有り難く存じます。

活動の更なる深化を目指して

事業推進プロジェクトサブリーダー

群馬大学医学部 医学部長 調 憲



近年、地域における医療体制の見直しや医師の地域偏在、診療科偏在を解消する重要性が再認識されました。

本事業の目的は、ポストコロナ時代に医師不足地域に必要とされる医療を提供できる医師を養成することです。埼玉県は全国の中でも医師不足が最も深刻な地域であり、特に県北では医師不足・偏在が顕著で、埼玉から群馬へ県をまたいで病院に通っている患者さんも多いという地域性があります。受け皿となっている群馬県の医療情勢としても、医師総数の不足、医師の地域偏在、医師の診療科偏在の3つが喫緊の課題になっています。3つの課題の解消に向けて行政も取り組みをすすめていただいておりますが、行政単位を超えた県境への支援は難しい点もあります。

一方で、誰も経験したことのないスピードで進行する我が国の高齢化と人口減少は今後の医療のあり方に大きな変化をもたらすことになるかと確信しています。おそらく、医師総数の不足、地域偏在、診療科偏在は県境に限った問題ではなく、我が国のもっと広い地域で顕在化してくる可能性があります。こうした背景の中、地域の課題に対応するべく、両大学が連携し、県境地域に精通した「地域を良く理解する」、「地域への愛着を持つ」、「課題の発見と解決に対する意欲を持つ」医師の育成を目指し、「県境地域の医療情勢に重点をおいた教育」を行うことは極めて意義深いことと感じております。最後になりますが、両県の医師育成拠点として連携を密にする機会をいただきましたことに感謝申し上げます、私のご挨拶とさせていただきます。

03 特別講演

講師

宮崎県都農町国民健康保険病院 院長

吉村 学 先生

日本プライマリ・ケア連合学会 プライマリ・ケア認定医/指導医 総合診療医
元宮崎大学医学部地域医療・総合診療医学講座（宮崎県寄附講座）教授
医学博士（医学教育）



Profile

- 1966年 鹿児島県生まれ
- 1991年 宮崎医大（現・宮崎大医学部）卒
自治医大病院、六合温泉医療センターなどを経て
- 2003年 岐阜県揖斐郡北西部地域医療センター長
- 2015年 宮崎大学医学部地域医療・総合診療医学教授
- 2025年 現職



演題

地域医療の志の育成

講演要旨

今回の講演では演者が2015年から10年間勤務した宮崎大学医学部での地域医療教育の取り組みについて紹介していく。低学年での講義や夏季実習、看護科とのごちやまぜ実習、学生サークルの立ち上げやその支援も行った。特に2018年から導入した地域包括ケア実習(高学年4週間、必修型県内全域展開)や特別カリキュラムである長期滞在型地域医療実習などから得られた知見を中心に紹介する。

臨床実習では挨拶のやり方、実際の診察やチームの一員として働くこと、医療機関だけでなく在宅や地域での生活を学べるように配慮した。日々の振り返りや印象に残ったことをイラストにしてシェアしたり、多職種からの評価もお願いした。実習導入前の根回しやクレーム対応、現地での指導者講習会も支援した。

毎回医学生の発表会をして、改善点を明らかにしていった。コロナ禍にも直面したがさまざまな工夫も行った。5、6年生の発表を1年生に聞いてもらう取り組みも好評であった。これまでの知見や課題、今後の展開などについても紹介する。

はじめて学ぶ地域医療・地域医療とチーム医療

はじめて学ぶ地域医療 ～かしこく健康にいきる～

群馬大学大学院医学系研究科総合医療学 教授/副学長 小和瀬 桂子

このプログラムは、地域医療志向を育むため、入学直後の時期に教養教育科目として開講しました。群馬大学と埼玉医科大学の1年生がオンラインを用いて合同で同じ講義を受講する共同学習です。地域医療は医療従事者ばかりでなく、住民・行政・地域で働く人々など、多くの方が支えております。群馬大学は総合大学の強みを活かし多角的な視点を養うため、医学科、保健学科、理工学部、共同教育学部、情報学部の学生が受講する授業といたしました。令和7年度は123名の学生が履修いたしました（医学科59名、保健学科37名、理工学部9名、共同教育学部14名、情報学部4名）。

講義はすべて実際に各分野で地域医療等を行っている教員がオムニバス形式の講義を行いました。特に、群馬県と埼玉県地域医療で求められている総合診療、在宅医療、救急医療、周産期医療、感染症医療、地域保健、肝疾患事業、医療保険制度等について、群馬県の取り組みも含めた講義を行いました。

さらに、学生が両県について住民の視点に立ち「地域を知る」ために主体的な学びを促すグループワークと発表も行いました。本年度は群馬県の各市町村の特徴を調査し、コミュニティ・アズ・パートナーモデルを用いてその地域の課題を抽出し、自ら解決策を考え、グループ内で討論を行いました。成果発表はオンラインを用いて両大学合同で行い、質疑応答を行いました。

授業終了時のアンケートでは（回答率85.4%）、「地域医療に対する興味関心を持つことができた」、「この授業で学んだことは将来役に立つと思う」、と答えた学生は9割以上であり、自由記載では「地域医療に限らず、群馬や埼玉について良く知ることができた」「色々な観点から群馬県を見つめることで地元の新たな一面を発見することができた」「他の学部や埼玉医大の学生と関わることで1つの視点だけでなく、多角的に地域医療について学ぶことができて良かった」「医療とは単純に悪い所を見るだけでなく、治ってからのこれからの人生についても診ることであると気付いた」「地域医療は専門の人だけがやるものだと思っていたが、自分も担えると思った」などの肯定的な意見が多く認められました。

今回のシンポジウムで、実際に授業を受けた学生がその学びの一端をご報告いたします。

・各専門分野の教員によるオムニバス形式の講義



・全学部学生交えてのグループワーク・埼玉医科大学との合同発表



はじめて学ぶ地域医療・地域医療とチーム医療

「はじめて学ぶ地域医療」を通して得た学びと実践

群馬大学医学部医学科1年 大山 由莉

本プログラムでは、講義やグループワークを通じ、群馬県を中心に地域医療の現状を幅広く学習いたしました。また、埼玉医科大学とのオンライン共同授業では、埼玉県の地域医療についても理解を深める契機となりました。

地域医療は、医療従事者だけでなく、住民や行政などの協力によっても支えられていると学習しました。このことから、地域医療は医学部に限らず、さまざまな学問領域と関わっていると考えようになりました。また、各地域の特性を理解することは、生活環境から健康増進を図るゼロ次予防に直結しており、地域全体で健康を支える重要性を再認識いたしました。

群馬県内の15市町村について行ったグループワークでは、学部や出身地の垣根を越えて意見交換することができ、視野を広げることに繋がりました。また、県内出身者である私も、他班の発表からも地域の魅力を新たに発見することができたと感じております。

シンポジウムでは、私が所属したグループで調べた桐生市について、その特徴や地域医療の課題解決に向けて議論したことを中心に報告いたします。



多学部合同のグループワーク



グループ発表（桐生市）

県境地域から学ぶ地域医療集中演習・利根川プログラム

「利根川プログラム」～埼玉・群馬の県境地域での合同授業～

群馬大学医学部附属病院 地域医療研究・教育センター 准教授 羽鳥 麗子

埼玉県北部と群馬県の県境地域は、両県に共通して医師不足を抱えるとともに、県境を越えた患者受診が日常的に生じている地域です。このような医療環境においては、総合診療を基盤に、救急医療、在宅医療などを含む幅広い役割を理解し、医療圏全体を俯瞰する視点が不可欠です。「利根川プログラム」では、地域医療のジェネラリストとして社会に貢献できる医師の育成を目的に、埼玉医科大学と群馬大学が連携し、短期集中型の臨地実習を中核とした教育プログラムを提供しています。

オンデマンド型オンライン授業による事前学習および振り返り学習では、地域の人口構成、医療資源、医療圏の特性について調査・整理を行い、地域住民の視点に立った地域診断を実施しました。また、二大学合同のバスツアーおよび医療機関での臨地実習を通じて、医師不足地域の地理的状況や医療提供について実地で学ぶとともに、地域で診療に従事する医師や医療スタッフとの意見交換を行いました。参加学生からは、「地域医療を自分事として捉えられるようになった」「将来の進路や専門性を考える具体的な契機となった」との声が多く得られ、地域医療への理解とキャリア意識の向上が確認されました。

今後は、医学生に加え、看護学やリハビリテーション学を学ぶ学生の参加も促し、地域医療を担う人材育成の基盤として継続的な発展を目指します。シンポジウムでは、「利根川プログラム」を履修した医学生からの学びについて、報告させていただきます。



公立藤岡総合病院



桐生厚生総合病院



合角ダム



済生会加須病院



秩父市立病院



ご当地ランチで休憩

県境地域から学ぶ地域医療集中演習・利根川プログラム

「利根川プログラム」を通して学んだ地域医療の在り方

群馬大学医学部医学科1年 岡崎 兼進

「利根川プログラム」では普段見ることのできないような病院の裏側まで見学することができました。それらを通して、医療は医師一人で完結するものではなく、多くの医療従事者がそれぞれの専門性を発揮し、協力することで成り立っているということを再認識しました。またその地域の特性にあった病院の形にも気づくこともできました。

地域の中核病院である桐生厚生総合病院では、専門性の高い医療や入院治療が提供されており、薬剤師、放射線技師、検査技師などの多職種が連携して診療を支えている様子を見学しました。この経験を通して、チーム医療の重要性を具体的に理解することができました。

一方、日常的な疾患から救急対応まで幅広く診療する地域医療の拠点である秩父市立病院では、地域の人口規模や医療資源に応じて、総合診療医が中心となり少ない医師数で様々な患者さんに対応し、さらにはソーシャルワーカーの方も協力して、救急医療や退院後の生活支援まで含めて地域全体を支えていることを学びました。

また、公立藤岡総合病院での実習では、研修医の方々から直接話を聞くことで、医師としてのキャリアをより具体的にイメージすることができました。本プログラムへの参加を通して、地域医療を支えるためには地域の特性を理解することが不可欠であると実感するとともに、早い段階から医療現場に触れることが、将来の進路選択や学習意欲につながる重要な経験であると感じました。



桐生厚生総合病院



秩父市立病院



武甲山を臨む

埼玉医科大学 独自の取り組みについて

段階的に学ぶ地域医療教育プログラム

埼玉医科大学 医学教育センター 助教 金田 光平

埼玉医科大学医学部では群馬大学との共同プログラムの他に、独自のプログラムを実施している。

1年生では「在宅医療早期体験実習」として埼玉県内の群市医師会より推薦いただいた医療機関（約70施設）に学生が赴き、訪問診療や往診に同行する実習を行っている。実際の医療現場での経験がほとんどない学生にとって非常に貴重な学びの場となっている他、実習先の医療機関からも学生の姿勢や態度について非常に高い評価を得ている。また、1, 2年生の「地域医療とチーム医療」ユニットの中で埼玉県の地域医療の現状や今後求められる医療に関する動画教材の視聴授業も行っている。

3年生になると、「地域医療とチーム医療」内で「感染症GISデータサイエンス演習」を行っている。このプログラムでは、新規感染症流行時における行政や医療の対応をシミュレーション教材にて学ぶ他、感染症疫学に関する知識や感染症流行モデルを演習形式で学修している。演習後のアンケートでは肯定的な評価が多かった。

臨床実習期間では、「コモンディーズの臨床推論」を11コマ演習にて実施し、双方向性の学修により高い学生の自己評価を得た他、総合診療内科での実習においては中央検査部と合同で「感染症実習」を実施している。さらに、臨床実習の最終段階である6年生のCC-STEP3においては、4週間を学外実習に充てているが、実習先の施設が立地する地域の地域診断を行う課題を実施している。約7割の学生が地域診断は学外実習に役立ったと回答している。

本学地域枠学生向けのプログラムとして、2年生選択必修でのサブユニット「総合診療とプライマリ・ケア」、課外学習プログラム「埼玉の医療」が挙げられる。前者は埼玉県内でプライマリ・ケアを実践している医師が講師となり、プライマリ・ケアの概念、地域医療や地域連携についての知識やアプローチなどを学修している。後者では将来埼玉県医師不足地域や特定診療科での医療に従事する地域枠医学生に対し、学習会を開催している。講師は特定地域に勤める医師や特定診療科の医師、地域枠の先輩医師や学生など多様である。また、8月の自治医科大学医学生主催の夏季地域医療実習や12月の埼玉県知事訪問も本プログラムの一環として行われている。

上記のように本学では本事業の開始に伴い、多くのプログラムを計画・実施している。



1年：在宅医療早期体験実習
まとめ授業での学生の発表



3年：感染症GISデータサイエンス
演習の授業の様子



2年：選択必修 総合診療とプライマリ・ケアの授業の様子

04 両大学合同の教育の報告

埼玉医科大学 独自の取り組みについて

地域枠奨学生としての経験 ～自治医科大学との夏季研修～

埼玉医科大学医学部1年 林 咲希

地域枠奨学生でありながら一度も秩父地域に行ったことのなかった私は、将来勤務するかもしれない場所なので、観光も兼ねて、どのような医療をやっているのか、どのような人たちが住んでいるのかを実際に体験してみたいという思いで、自治医科大学との夏季研修に参加しました。

初日には、地域枠の医学生のカリヤパスについて講演会がありました。地域枠奨学生がこれからぶつかるであろう壁やそれをどう捉えるのかなど教えていただき、具体的に将来を考えることができました。普段はなかなか地域枠の方とお話をする機会がないですが、他大学の地域枠の先輩や、医師として義務年限をまっとうしている先輩医師と交流でき、不安に思っていることを質問したり、地域医療の現状を明確にしたりすることができました。

翌日は、秩父市立病院に行き、外来診療を見学しました。1年生で医師の方についてまわる機会は貴重なものでした。日頃勉強しているものがほんの一部に過ぎないことを痛感し、もっと勉強したり、いろいろな人と会話をして力をつけたいと思いました。

3日目は、大滝保健センターで地域住民の方を相手に健康教室を開き、その後一緒にお食事をとってお話しました。いかに地域住民の方々に診療所が頼りにされていて、愛されているのを知ることができました。

この3日間で普段できない経験を沢山させていただきとても勉強になりました。このような機会を提供してくださった医師の先生方や自治医科大学の方、秩父市民の皆様感謝いたします。



05 連携医療機関からの報告

(群馬県連携医療機関)

連携医療機関における利根川プログラムでの実習受け入れ

桐生厚生総合病院 院長 加藤 広之

桐生厚生総合病院は繊維産業の歴史を背景に発展した群馬県東部の桐生市に位置し、桐生市とみどり市からなる桐生保健医療圏で唯一の公立総合病院として、高度急性期から急性期、回復期までの幅広い診療を行う地域中核病院です。

また、紹介受診重点医療機関として、かかりつけ医をはじめとする地域の医療機関との機能分担・連携を推進し、患者さんの円滑な受診と地域医療の効率化を図る拠点として重要な役割を担っております。

当院では、夏と春に開催の「利根川プログラム」の実習先として、埼玉医科大学と群馬大学の医学生を受け入れています。令和7年度夏季利根川プログラムでは、8月に、両大学の医学生および教職員の方々11名が来院しました。初めに当院の紹介や、地域の特色や医療環境を紹介し、施設案内では、医学生が検査台に上がり、患者さんの立場をイメージしながら説明を受ける場面や、検査科で実際の検体を確認している様子を見学するなど、直接見て、聞いて、体験する内容となっております。また研修医との懇談では、多く前向きな質問が寄せられ活発な懇談の場となりました。両大学の医学生にはこのプログラムを通じて、地域医療の現状と役割についてご理解いただき、将来の地域での活躍を期待しております。

<参加学生の感想（一部抜粋）>

- ・桐生厚生総合病院は研修病院であり、規模の大きな病院であると感じた。見学では複数の職員から説明を受け、院内の雰囲気や業務内容について理解を深めることができた。特にCT装置を間近で見学したことで、医療技術の進歩を実感する機会となった。(1年生)
- ・見学を通じ、地域医療を担う病院の施設や医療機器について理解を深めることができた。実際に医療現場で働く職員の話聞くことで、将来のキャリアや働き方を考えるきっかけとなった。また、移動中には地域の立地やアクセス状況を把握することができた。(1年生)



院長先生ご挨拶



薬剤部見学



放射線技術科見学



中央検査科見学



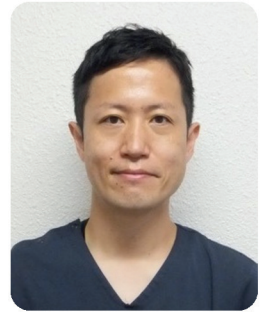
研修医との懇談



見学を終えて

連携医療機関からの報告

(埼玉県連携医療機関)



秩父市立病院 臨床研修管理室 室長 加藤 寿

ポストコロナ時代において、医療の不確実性や複雑性が増す中、地域医療を実践する総合診療医には臓器別専門に分断されない包括的診療能力と、住民を対象とする地域全体を診る視点がこれまで以上に求められている。当院では埼玉医科大学から学生の地域医療実習を受け入れ、総合診療医の専門性を体感的に学ぶ教育の場を提供してきた。

本実習では、外来診療への参加、病棟での患者担当、初診外来におけるmini-CEXを通じて、症候から鑑別を広げ、限られた情報の中で臨床推論と意思決定を行う総合診療医の思考過程を学ぶ。さらに、訪問診療への同行や住民啓発の現場見学を組み合わせることで、疾患単位ではなく「生活の中の医療」を実感し、医療・介護・福祉・行政が交差する現場を経験する。

医師不足地域における総合診療医の専門性は、単なる“幅広さ”ではなく、複数の健康課題を同時に抱える患者を包括的にマネジメントし、地域資源を活用しながら最適解を導く高度な実践知にある。学生は実習を通じて、総合診療医が地域医療の基盤を支える専門職であること、そして自らが将来その担い手となり得ることを具体的にイメージしてもらえればと考えている。

本事業には大学と地域が協働し、学生期から総合診療医の専門性と魅力を可視化することで、将来の進路選択につながる人材循環を生み出すことが期待される。医師不足が深刻化する地域において、教育を起点とした持続可能な医師養成モデルとして、本事業で当院を含めた地域医療機関が担う役割と今後への期待について報告する。



秩父市立病院



利根川プログラム



埼玉医科大学 医学部2年生
「選択必修 総合診療とプライマリ・ケア」



「選択必修 総合診療とプライマリ・ケア」
グループワーク中の様子

06 今後の展望

埼玉医科大学医学部医学教育学 教授 柴崎 智美

群馬大学大学院医学系研究科 医学教育開発学分野 教授 岸 美紀子

令和4年5月に申請書を提出して始まった本事業も、折り返しの年度を終えようとしています。群馬大学と埼玉医科大学は、地域への愛着を持ち、地域を理解し地域で役に立つ医師の育成を共通目標に取り組んで来ました。

令和4年度は新しいプログラムを検討し、利根川プログラムは試行事業として開講しました。令和5年度には、教育プログラム1～5すべてにおいて新たな内容の講義・実習・演習が始まりました。令和6年度までに正規の科目・ユニットは開講・拡充され、これまでのシンポジウムでも、学生の学びの一端をご紹介してきました。

両大学で共通の目標を目指して地域診断を行い、両大学を繋いで行う1年生のプログラム（地域医療とチーム医療、はじめて学ぶ地域医療）は、大学間連携だけでなく、群馬大学内では学部間連携の教養科目として地域医療を学ぶ貴重な場になっています。利根川プログラムは両大学からバスが出発し、医師不足地域の県境地域の医療機関で合流し、実際に地域医療を目の当たりにします。その他、埼玉医科大学では、全学生を対象に、1年生の在宅医療早期体験実習、3年生の医学部保健医療学部合同IPE（専門職連携教育：Interprofessional Education）、感染症GISデータサイエンス演習、臨床実習において行われる感染症演習など多彩な新しい実習演習が動き始めています。

このように多くのプログラムの運用を行いながら両大学の学生のみならず教職員も連携を深めてきました。これらの学びには、両県、両県医師会、そして県境地域の医療機関などの多くの関係者の協力が必要です。今回は、実習を受け入れてくださっている医療機関からもご報告いただき、両県で進んでいるこの事業の成果、課題を皆さんで共有できればと考えています。

折り返し年度には文部科学省の中間評価を受けて、新たなフェーズに入ります。これまで作ってきた教育プログラムの深化、横展開のみならず、地域枠学生を中心にした医学部生の卒後のキャリアを視野に入れた取り組みなど、事業終了後に向けて、さらに両大学は関係者とともに地域の健康と医療を支える医療人の育成に取り組んで参ります。





令和4年度文部科学省ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業認定（令和4年度～10年度、7年間）

埼玉・群馬の健康と医療を支える 未来医療人の育成 Newsletter

発行 埼玉医科大学・群馬大学 Satama Medical University・GUNMA UNIVERSITY

第7号

令和6年度 埼玉・群馬未来医療人育成シンポジウムを開催しました

群馬大学大学院医学系研究科 総合医療学講座 総合医療学分野 教授 小和瀬 桂子

■ テーマ：「地域から地域へ！つながる未来の医療人を育てる」

令和7年3月2日、エテルナ高崎（群馬県高崎市）において、令和6年度埼玉・群馬未来医療人育成シンポジウムを開催しました。会場、オンラインあわせて、184名の皆様にご参加いただきました。

第一部の特別講演では、富山大学医学教育学講座教授の高村昭輝氏から、「未来の医療人～地域医療を守るプライマリ・ヘルス・ケア医とは～」を題して、医学教育や地域医療について、中高生や医学生向けにご講演いただきました。



高村先生ご講演

第二部では、埼玉医科大学・群馬大学共同で、教育プログラムの振り返りを行いました。医学生を中心に学修成果を報告し、「地域を基軸とした優れた地産地消医療の育成（プログラム1）」と「はじめて学ぶ地域医療へかこく健康に生きる～（プログラム4）」では、両県の住民の視点から「地域を知る」学修を行い、コミュニティ・アズ・パートナーモデルを用いた地域の課題抽出・グループ討論の成果について発表しました。



埼玉医科大学医学生発表（プログラム1）



群馬大医学生発表（利根川プログラム）



シンポジウム会場（エテルナ高崎）



シンポジウムを終えて

特別講演に対する感想（ワードクラウド）
地域医療、総合診療、海外での経験について、多数の感想が寄せられました。

令和6年度 第1回 連携推進会議

群馬大学大学院医学系研究科 総合医療学講座 総合医療学分野 教授 小和瀬 桂子

■ 「地域から」地域医療マインド育成に取り組みます

令和6年度、すべての教育プログラムの拡充・開発が完成年度を迎えました。令和6年度第1回連携推進会議が令和7年3月2日に群馬県高崎市のエテルナ高崎にて開催されました。中高校生・医学生43名が会場に参加して、埼玉医科大学・群馬大学の医学生 合計33名が中高生の悩みや質問に答えました。



令和6年度 医学生とのふれあい相談会を開催しました

群馬大学医学部附属病院 地域医療研究・教育センター 講師 羽鳥 麗子

当事業でははじめてのイベントとして、医師を目指す中高生の皆さんのために、「医学生とのふれあい相談会」を令和7年3月2日に群馬県高崎市のエテルナ高崎にて開催しました。中高校生・医学生43名が会場に参加して、埼玉医科大学・群馬大学の医学生 合計33名が中高生の悩みや質問に答えました。



● ふれあい相談会に参加した中高生に対するアンケート調査結果 ●

質問「両県へ働く医師を増やすためにどのような取り組みが必要か」
多くの回答が、地域枠の拡大や充実、医師が働きやすい環境作りに関するものでした。また、この相談会のような医師や医学生とのふれあいの場を増やすこと、医療に魅力を持つ為のイベントや活動を充実させるアイデアが目立ちました。

質問「地域住民と医学生の間わりで良いと思うものはありますか」
● 医学生と地域住民との対話型ワークショップ
● 医学生が地域行事への参加
● 健康増進・予防活動への医学生の参加



令和7年度 シンポジウムのお知らせ

令和8年 2月23日(月・祝)

会場：ウエスタ川越

※ウエスタ川越 併用予定



令和4年度文部科学省ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業認定（令和4年度～10年度、7年間）

埼玉・群馬の健康と医療を支える 未来医療人の育成 Newsletter

発行 埼玉医科大学・群馬大学 Satama Medical University・GUNMA UNIVERSITY

第8号

本プロジェクトで大切にしていること vol.7

埼玉医科大学 学長 事業推進代表者 竹内 勤

■ 埼玉群馬の魅力とそれを支える医療人育成

埼玉県と群馬県は、関東の中部から北部にあり、利根川による長い流域を挟んで南北に隣接し、歴史的にも深い結びつきがあります。医療における繋がりも強く、医師不足が深刻な両県地域の医療を支えるために相互に連携してきました。



竹内 勤

2023（令和5）年4月から、計画通り5つのプログラムが順次、立ち上がり、1年生から6年生までの全学年においてプログラムが展開され、2024（令和6）年からは、1年生の在宅医療早期体験実習も行われています。実際の医療現場を訪問した体験は、医師を目指す医学生にとって大変印象的な学習の場になったのではないかと思います。

在宅医療早期体験実習について（埼玉医科大学）

埼玉医科大学 医学教育センター 助教 小池 啓子

■ 埼玉・群馬県境での在宅医療早期体験がもたらした学生の学び

埼玉医科大学の医学部1年生の「在宅医療早期体験実習」が開始し、2年目を迎えました。県内で在宅医療を担う医療機関等へ学生が直接つoward、医師の活動に同行させていただくプログラムです。

この実習は、臨床入門の実習の一つとして位置づけられており、学生は訪問診療や往診、施設訪問等の場面に約半日間行かせていただきました。保健医療福祉に関する初學者である1年生は、専門領域の学習が未熟な段階であります。このため、本実習では、まず地域を知り、生活者である人々への医療への、医師の姿勢、療養者やご家族との対話から、医師になるための自己課題を見出すことを目標としています。



今年度は、埼玉県と群馬県の県境に近い地域の機関にも学生の受け入れを快諾いただきました。長洲村にある南須原で実習を受けた学生の星野伊央里さんは、自身の社会経験や生活経験を踏まえて、医師だけでなく事務職や看護職、介護職への関心を高めるとともに、地域連携の実践について「医師の偏在や、地域の特性に応じた柔軟な連携や協働を知ることができた」「スタッフや地域住民との交流と大事にできる医師の大切さ改めて実感した」と話していました。

夏のプログラム 2025

■ 利根川プログラムバスツアー

埼玉医科大学副医学部長 事業推進プロジェクトサブリーダー 林 健

春先のおよび夏の利根川プログラムバスツアーも2023年度開始から回数を重ね、両県の13の連携医療機関すべてに見学の機会を設けていただきました。夏はお盆、春は年度末と、病院が特に忙しい時期に、多くのご負担をお掛けしております。



【学生の感想】 埼玉医科大学 2年 柿崎 里紗
利根川プログラムに参加して最も良かったことは、現場で働く医師の声を直接聞いたことです。大学の授業では設備見学や説明を受けられますが、研修医の立場から現場について聞く機会は少ないと思います。



■ 自治医科大学と埼玉医科大学の夏季研修

埼玉医科大学 医学教育センター 准教授 井上 直子

自治医科大学の学生との合同の実習を行いました。8月20日(水)から8月22日(金)の3日間という短い期間でしたが、お互いに大変刺激のある実習だったようです。特に2日目は、秩父市立病院、小野野中央病院、大瀧国民健康保険診療所に分かれた実習で、その中の一つの病院で「緩和ケア」に関するカンファレンスに実際に参加させていただきました。



【学生の感想】 埼玉医科大学 1年 長谷川 尚夕
この夏季研修は、自身の将来のキャリアについて改めて考える大きなきっかけとなりました。実際の医療の現場を実習させていただくことで、大学卒業後にどのような場で働くのか、また将来共に働く方々がどのような人々であるのかについて、具体的なイメージを持つことができました。

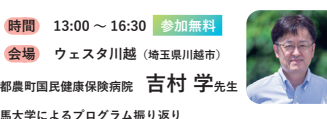


令和7年度 埼玉・群馬未来医療人育成シンポジウムのお知らせ

令和8年 2月23日(月・祝)

第1部 特別講演：宮崎県都農町国民健康保険病院 吉村 学先生

第2部 埼玉医科大学・群馬大学によるプログラム振り返り



※詳細は、事業ホームページ・SNSにてご確認ください。

埼玉県医師育成奨学金

埼玉県に愛着があり「将来医師として県内の地域医療に貢献したい！」という強い意志を持つ医学生に奨学金を貸与しています。

奨学金のポイント

貸与期間の1.5倍の期間である9年間、特定地域の公的医療機関又は特定診療科等に医師として勤務した場合、奨学金の返還を免除

特定地域の公的医療機関の例（令和7年4月1日現在）
県立循環器・呼吸器病センター、秩父市立病院、東松山市立市民病院、深谷赤十字病院、済生会加須病院、小川赤十字病院、国民健康保険町立小鹿野中央病院

特定診療科等

埼玉県内の病院の産科、小児科、救命救急センター

貸与額

月額20万円（国公立大学は15万円）

募集人数

47名 ※令和7年度入学者募集例

埼玉医科大学	19名	北里大学	2名
順天堂大学	10名	東京医科大学	2名
日本医科大学	2名	東京科学大学	5名
日本大学	5名	獨協医科大学	2名



埼玉県マスコット「コバトン」

より詳細な内容は
QRコードをチェック！

制度について
(埼玉県HP)



卒後の進路について
(埼玉県総合医局機構HP)



詳細及び最新の情報については、各大学もしくは下記担当までお問い合わせください。

問合せ先

■埼玉県 保健医療部 医療人材課 048-601-4600

ぐんまの未来を支える
医師を目指す皆さんへ

群馬県の 医学部地域枠

のごあんない



群馬大学 R8定員 20名



順天堂大学 R8定員 1名



東京医科大学 R8定員 2名



帝京大学 R8定員 2名



杏林大学 R8定員 1名

群馬県では、
この5大学の医学部に
一般の選抜とは別に
「地域枠」*を設定
しています

*大学によって、枠の呼称が
異なります

将来、群馬県内の地域医療に貢献したいという強い意志を持って、この地域枠として進学する学生に、修学資金（群馬県緊急医師確保修学資金）を貸与しています。

貸与額 群馬大学 月額15万円又は10万円（ほか入学金相当額約28万円）
県外私立大学 月額25万円

貸与条件 ・卒業後、群馬県内の公的病院等（※）において、10年間、医師として臨床研修及び診療業務に従事すること 等
・従事要件等を満たすことで、修学資金の返還が全額免除となります。

（※）卒後の従事要件の対象となる医療機関は、県内89施設が対象です（令和7年4月現在）

群馬県健康福祉部医務課医師確保対策室
電話 027-226-2540
メール imuka@pref.gunma.lg.jp

🔍 群馬県緊急医師確保修学資金

制度の詳細はこちら ▶



MEMO

Handwriting practice area with 20 sets of horizontal lines. Each set consists of a solid top line, a dashed middle line, and a solid bottom line. The top and bottom lines are blue, and the middle line is green.





文部科学省「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」選定
「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」事業

令和7年度 埼玉・群馬未来医療人育成シンポジウム 抄録集

発行日 2026年2月23日

企画・発行 埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成事業事務局

住所 〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38



☎ 049-276-1109

✉ sgmirai-smu@saitama-med.ac.jp

印刷会社 株式会社ヨーコー
